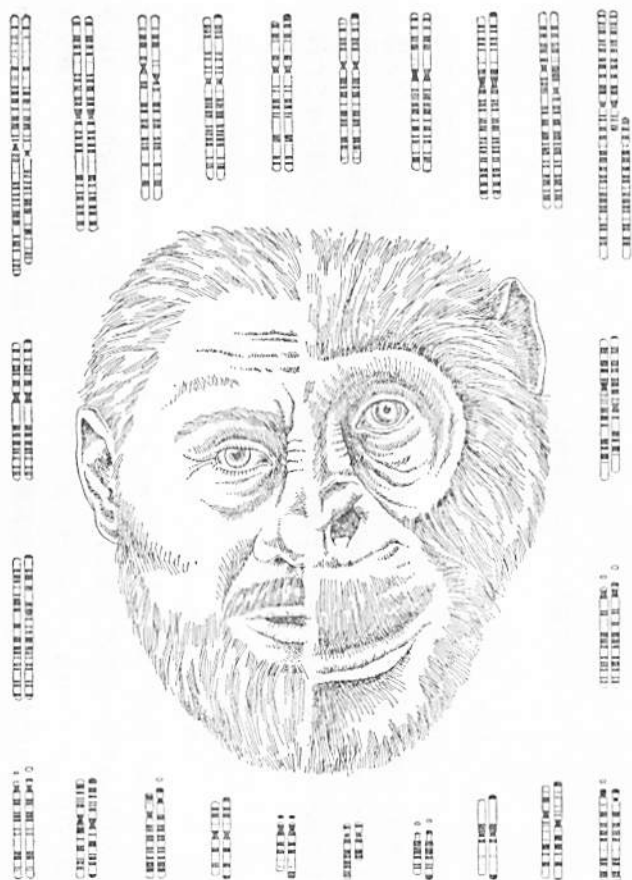


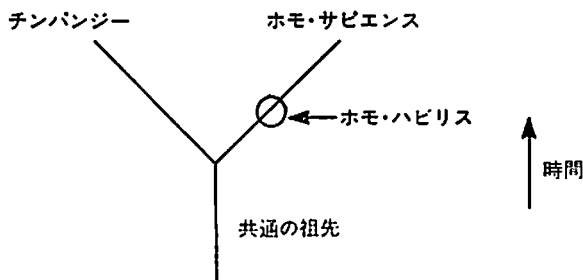
人間の精神にみられる特質は、ホモ・ハビリスが現生人類へと変化した二〇〇万年間に進化した。その本質的な所産——精神発達を導く豊かな後成規則——は、今になってようやく科学者の十分な注目を集めるようになっていた。最古の真正人類であるホモ・ハビリスも、この一連の特異な規則を、今よりも単純な構成であっただろうが、やはり身につけていたはずである。ホモ・ハビリスの精神発達の仕方、現生人類であるホモ・サピエンスのそれへと変化させた一連のできごとを復元できるならば、現在人類が置かれている状況の起源をもっと深く理解することができるだろう。そのためには、古生物学者が岩盤を掘り下げ、化石を発見し、進化系統樹を推理するように、ある形態の後成規則から次の形態へと時間的段階を追ってみていくことが必要である。

乏しい骨の断片から人類の骨格の進化を解き明かすのは、もちろん非常に難しいことだ。発達心理学上はかなり貧弱な証拠から精神的な事柄の歴史を再構成するのは、これよりもはるかに不確実で気の滅入るような仕事である。しかし、この仕事には希望がないわけではない。あらゆる資料と手がかりを慎重に検討することなしに放棄してしまうには、問題はあまりにも重要である。もし科学者がこの領域の脆弱な地盤へあえて踏み込んだとすれば、それだけで、前進する十分な理由をもっていることになる。だが、慎重に歩を進めなければならない。

進化生物学の専門家たちは、簡単だが確実な方法で絶滅種の復元を行っている。彼らは、絶滅種を、それから進化した生物と、より下等な現生種の間に「夾叉」してみる。多岐にわたる生物学上の証拠から考えて、人類は、チンパンジーの祖先ともなった、アフリカの類人猿に似た原始的動物の子孫で



遺伝子の運び手である染色体に強い類似がみられるので、人類とチンパンジー共通の祖先がそう古いものではないことがわかる。各細胞あたり、染色体は24種(22対の染色体と性を決定するXY染色体)ある。左側が人間の染色体、対応するチンパンジーの染色体はその右隣に描かれている(2)。(Chromosome diagrams: copyright 1980 by the American Association for the Advancement of Science)



あると思われる。実際に、ホモ・サピエンス（人類）とパン・トログロ
 デイテス（*Pan troglodytes*、チンパンジー）は、解剖学、生理学、染色体
 構造、酵素化学上の細部まで非常によく似ている。それは、ミバエや鳥
 類など、数百万年前に分化したことがはっきりとわかっている動物群内
 の二種間に認められる関係に類似している。研究者は、チンパンジーと
 最古の猿人は五〇〇万年から二〇〇〇万年前ごろの共通の祖先に由来す
 ることを確信しているので、この二系統の起源の共通性にはまったく疑
 いの余地はない。夾叉法は、この場合次のように適用される。チンパン
 ジーと現生人類双方にみられる特徴は、ホモ・ハビリスももっていた可
 能性が高いと考えられる。系統樹はほぼY字形になると思われ、問題の
 種は上の図に示した位置を占めるだろう。

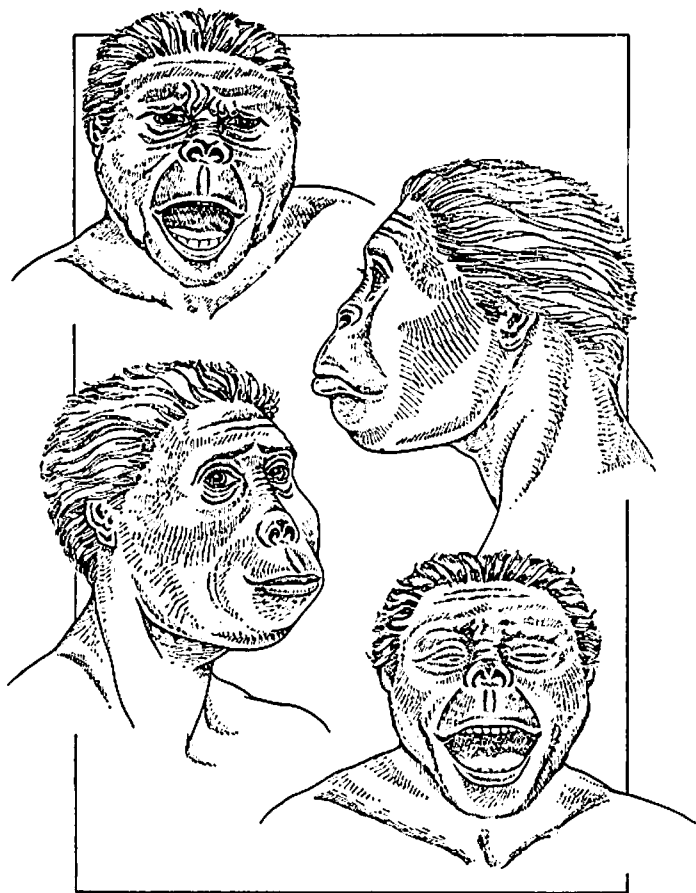
チンパンジーと現生人類（ホモ・サピエンス）が共有する特徴は、おそ
 らく両者の共通の祖先と、現生人類とこの共通の祖先の中間形態である
 ホモ・ハビリスによっても共有されていたはずだ。特徴が重複している
 ことは証明にはならない（進化生物学上の証拠にも証明となるものはほとん
 どない）。しかし、その特徴がY字の二つの分枝上、あらゆる時点で存在し
 た確度がかかなり高いと考えることはできる。絶滅種の行動と精神活動が

少なくとも部分的に想定できるのである。⁽³⁾

共通の特徴とは何だろうか。われわれは、化石化した遺残から推定された、食性や露营地に関する証拠にそつてその特徴をつなぎ合わせ、ホモ・ハビリスの世界を次のように想像してみた。⁽⁴⁾

東アフリカのンゴロンゴロ山の後方から曙光が広がり始めるころ、ホモ・ハビリスの男女や子供たちが十数人、涸れた河床を西へ西へと下り、湖畔にある大きなバンドの露营地へと向かう。二つの集団が出会い、緊張がみなぎる。大人たちが向かい合つてお互いを確認し合う。しかし、この前会つたのは何か月も前のことなので記憶は薄れている。年かさの男たちが進み出る。口を固く結んでにらんでいる者がいる。霊長類一般に見られる挑戦の合図だ。口をすぼませて、興奮してきたことを表わしている者たちもいる。大きなバンドのボスの男が敵意をむき出しにした。下手投げで何か投げるような格好で右腕を前に揺り動かし、小さなバンドを追い払う身振りをした。⁽⁵⁾しかし、この仕草は無視された。最初大人たちが、やがて若者たちが入り乱れる。彼らは、なだめるような口調でブツブツささやき合ひながら、手を伸ばして互いの体に軽く触れる。個々の発声はきちんと意味をもっているが、本当の言葉——綴り合わせて文章になる恣意的な記号——ではない。不安が鎮まるとともに、集団の中にほほえみと、短い突発的な笑い声広がっていく。若者たちはふざけあいをはじめ、追い駆けあつたり、争うまねをする。⁽⁶⁾

大きなバンドには肉の余りがあった。前日、男たちが食物を探して歩いていると、河床の泥土の中



ホモ・ハビリスの表情。チンパンジーと現生人類で類似した表情から推定した。上から、怒り、ふくれっ面、安らぎ、笑い(7)。

に若いカバの新鮮な死体が転がっていたのだ。道具を作ろうと、何人かが走って、大きな玄武岩の礫塊を両手一杯集めてきた。一人が、直径六センチくらいの、手に握りやすい石を選び取った。石槌にして使うのである。彼は、この石で別の礫を三、四回叩き、形は整っていないが、鋭い刃をもった剝片を剝き取った。⁽⁸⁾これらの剝片は、前後に動かして使われる小型のナイフとなり、残った石核は粗雑なチャップパーとなった。これらの道具を使って、狩人たちはカバを切り刻み、厚切りの肉塊を取り出した。頭蓋骨を叩き割って脳を手に入れ、胸郭を引き裂いて心臓と肺を取り出し、長骨を砕いて髓を引き出し、厚い皮で覆われた前腹部を切って、腎臓と肝臓と脾臓をむきだしにした。彼らは、いちばん好きなところをその場で食べると、強靱な関節の繊維質の靱帯を切り、ホーム・ベースに持ち帰るために四肢をバラバラにした。⁽⁹⁾石器は、残骸とともに打ち捨てられ、狩人たちの何十万世代も後の子孫である考古学者によって、発見されるのを待つことになったのである。

さてその翌日、大きなバンドは小さなバンドの成員に肉を分けてやった。食物がよび起こした興奮はすさまじく、狂気したハピリスたちは、すばやい身振りと言声の信号を使って闊達に話し合った。⁽¹⁰⁾新参者のなかには、他人の手や口にある肉塊から、こっそりと切れ端を失敬して食べることができ者も少しはいるが、ほとんどの者は、掌を差し出して鼻を鳴らし、分け前を請わなければならなかった。その日の午後、体のいちばん大きな男がせわしなく行きつ戻りつし、遠くを手で指し示したことをきっかけとして、小さなバンドは彼方の森林にある密営地を目指して旅立っていった。⁽¹¹⁾さよならのあいさつはない。人類の言葉にまだそれはなかったのである。

食物分配は、チンパンジーが原初的な形態で行っており、現生人類によって極端なほど儀礼化したものに高められているが、彼らのあらゆる解剖学的特徴が長い進化の始まりを示しているのと同じように、それはおそらくホモ・ハビリスの社会生活にとっても非常に重要なものであったろう。人類学者は、彼らが——おそらく猿人もそうだっただろうが——他のあらゆる霊長類と違って、食物を集めることと、長距離にわたってそれを運ぶことと双方ができたと考えている。ホモ・ハビリスは、狩猟や屍肉あさりで大量の動物性食料を集めた点でも特異であった。彼らは、他に例をみないほど多種の食物を享受していた。ときおり、たぶん毎日、食料採集者の集団は露营地を離れ、種子、漿果、堅果、根茎類、そして肉を捜しに出かけた。このような食物の中には、その場で食べられたものもあつたはずだが、一部分は、露营地に残ったバンドの仲間に分配するために持ち帰られた。不具者や子供を抱えた母親などが、きつとこうして食物を貰ったことだろう。石製のチャップパーの摩耗具合から、ホモ・ハビリスは、この道具を大きな根茎類を切るときも肉を切るときも兼用して使ったことがわかっている。大人は、男も女も食料採集に加わったようだが、長途の旅をし、狩猟を集中的に行つたのは男だつたと思われる。現存のほとんどすべての狩猟採集民が行つているのと同じ分業である。この点に関しては、ホモ・ハビリスはY字形の系統樹の反対側とも同じ特徴を示している。チンパンジーがヒビヤサルの幼獣を狩猟するとき、指押をするのはふつうオスなのである。

ホモ・ハビリスが残したものは、彼らの骨と貧弱な食餌の痕跡とホーム・ベースを画する環状の石群にすぎないが、彼らは、もっと複雑な「軟質の」動具類も使つていたはずである。チンパンジーは、

腐敗しやすい素材でできた道具を製作・使用する天才である。木の葉を噛みしだいてスポンジを作つて、木の窪みにたまった水を吸うし、葉を払つた小枝を巣に突っ込んでシロアリ釣りもする。敵を打ちすえるのに若木を引き抜いて使つたり、爪ようじ代わりに小枝を使つたりもする。ホモ・ハビリスは、大きな脳をもち、石器を作る能力も疑いなくもつていたので、それくらいのことではきただらう。旧石器時代の環境復元の第一人者であるグリン・アイザックは、狩猟し食物を運ぶ習慣は、簡単な道具——頭の良い類人猿なら簡単に考案できたかもしれない——を創り出す強い刺激となつただらうと言っている。また彼は、太古の人類は、動物を突き刺したり土を掘るために木の棒を使い、食物を運ぶのに亀の甲羅や樹皮製の盆や動物の胃袋を使つただらうとも考えている。

チンパンジーは、このほかに、ときとしてびっくりするような才能をみせる。実験室内では、小枝と萇を簡単な形に織りあげることができる（だが結び目を解くことはできない）。彼らは、ものを大きくさと色に従つて抽象的な分類項目に分けて、まとめることができる。人間の写真をあらゆる種類の動物の写真から区別することも、本来の形からいくぶんずれてはいるが、円やその他の基本図形を大きさ別に描くこともできる。チンパンジーに鏡を見せると、同種の他個体とどこか異なつたものとして自分自身を識別する。この能力を初めて調査したのはゴードン・G・ギャラップという心理学者であつた。彼は、麻酔をかけたチンパンジーの頭に赤い染料で印をつけ、目が覚めてから鏡を見せたのである。そのチンパンジーは即座に赤い印に手をあてて反応した。もし、ナルシストのホモ・ハビリスが穏やかな水面をのぞいたことがあつたら、彼は、見返している顔が自分の顔であつて、幽霊

の顔ではないことを理解しただろう。言葉ではないが、何か別の形でこう考えもしたかもしれない。これが私だ。バンドの喧嘩から離れて存在し、いつの日にか死ぬ私であると。もし科学者に十分な時間が与えられれば、これが本当かどうか推理し、したがって、自我と魂の進化史についてならんかの見解を出せるかもしれない。

生物学者も心理学者も、進歩的な特徴として一様に柔軟性を話題にする。たしかに、チンパンジーや大猩猩類はサルに比べてずっと多様な行動をする。玩具その他の新奇なものが与えられると、彼らは、体のいろいろな部分で触れ、さまざまな仕方ですりすり操作して調べるので、瞬間瞬間の反応を一般的な形で予測できないほどである。これと似たようなことだが、チンパンジーの子供は他の動物よりも遊びや探索をよく行う⁽¹²⁾。といっても、現生人類の大人や子供に較べるとずっとその頻度は低い。問題のホモ・ハビリスがこの中間にあることがここでも推測できる。動物にあっても、人間にあっても、遊びは行動の多様性を大きく押し広げ、多くの文化的革新の可能性を開く。ジョン・ポールドウィンとジャニス・ポールドウィンは、コーウィンという名の二歳のリスサルについておもしろい例を報告している。コーウィンがたまたま餌の粒を落としたとき、餌は籠の床で跳ね返った。コーウィンはこのできごとをゲームにしてしまい、わざと餌を落としては、跳ねている餌を追いかけて楽しんだ。ある日のこと、コーウィンが跳び上がったとき、餌が手から飛び出して、いちど籠の上方に跳ね上がったから床に落ちた。コーウィンは、それから飛び跳ねながらわざと餌をほうり上げて、いっそう複雑なゲームを創り出した。とうとう彼は、餌を空中にほうりつけて口で受けることを覚えた⁽¹³⁾。

こんな道化も役に立つことがある。ジェーン・グドールが、タンザニアのゴンベストリーム国立公園で研究したある劣位のオスのチンパンジーは、二つの空の灯油缶をいっしょに打ち鳴らすことを覚えた。このチンパンジーは、やがて奇妙な動きと音で自分が他に与える脅威を増大させ、その結果、二、三日のうちに、体の大きなものたちをおさえて群れの中で優位に立ったのである。⁽¹⁵⁾別の例をあげよう。ゲイゾ・テレッキが観察した少し体の不自由なチンパンジーは、狩猟時に自分の動作が鈍いことを、獲物の頭を繰り返し木の幹に打ちつけることで補っていた。⁽¹⁶⁾棒を頭で打つことを、頭を棒で打つことへと変化させ、人間的な行動へと進化するのはいともたやすいことであろう。ホモ・ハビリスか、あるいはその直系の祖先たちもきつとこの段階をとったことだろう。こうして、彼らは武器の長い悪徳の系譜を開始させたのだ。その最終的形態である核兵器は、ヒトを絶滅させ、結局文化が遺伝よりも優れているのだと——突然、決定的な仕方——示威することもできるのである。

チンパンジーの後成規則、すなわち類人猿の精神が段階を迫って組み立てられていくプロセスについては、まだほとんど何もわかってはいない。心理学者は、ふつう人間について使われる研究方法を類人猿にも拡張して適用し、チンパンジーの知的発達過程をある程度追跡している。その結果、チンパンジーの子供たちがずいぶん上手に物を操作できることがだんだんはつきりとわかってきた。また、何歳ぐらいになれば、初歩的なパズルを解き、記号の意味を記憶し、簡単な芸術活動を行えるかもわかっている。⁽¹⁷⁾しかし、類人猿に飲み物の味、幾何学模様、物の持ち方、表情等々を選ばせる選択に関するテストはまだなされたことがない。それもそのはずで、基礎理論に対するそのような分析的研究の

重要性は、人間の場合ですらまだほとんど認識されていないからである。これらの動物にあっても、精神発達に因して後成規則が存在しており、人間の場合と同様、彼らも生得的な偏向性をもっていることは明らかだ。チンパンジーは人間と似たやり方で近親相姦を忌避する。つまり、自分の群れの成員で、幼いころ非常に親しく接していたものを決して性交渉の相手にはしないのである。⁽¹⁹⁾また、チンパンジーには、外見上人間の恐怖症に似た反応が少なくとも一つある。アフリカの原野でチンパンジーに剝製のヒョウを見せると、彼らはすさまじい反応を示した。吠え叫びながら走り出し、互いに抱き合つてキスをし、糞尿を垂れ流したのである。この「怪物」に向かつて突進しようとする若者を押し留めるものもいた。最終的に剝製の動物が無害だということがわかると、群れは、これを調べようと、畏怖としか言えないような感情を見せながら近づいていった。⁽¹⁹⁾

これらの話は、もちろん示唆に富んだ挿話としてしか位置づけられないものである。だが、一定の実験方法をも教えてくれる。類人猿が、類似した拮抗的な刺激——たとえばライオンやハイエナ対ヒョウ——に対してとる反応を、年齢やそれまでの経験の度合いごとに比較するのはかなり容易にできるはずだ。それによって、認知発達のパターンが明らかになるだろう。またこの情報が、急速に蓄積されつつある人間の精神発達のデータと一つ一つ照合されたならば、夾叉法を用いて、ホモ・ハピリスの精神の有様を試験的に描き出すことができよう。そうなれば、ホモ・ハピリスから現生人類への進化過程で起こったできごとについて、信頼性の高い推定を行うことができるだろう。

その中間の事情、つまりホモ・エレクトトゥスの生活様式については相当量の情報がある。ホモ・エ

レクトゥスは約一五〇万年前にホモ・ハビリスから進化し、その一〇〇万年後にホモ・サピエンスを誕生させた、両者の移行形の人類である。

ホモ・エレクトゥスが残した骨器や石器の断片から、考古学者は、類人猿やホモ・ハビリスよりも高い知性をもった人類の姿を描き出した。ホモ・エレクトゥスのバンドは、本拠地と一時的な居住地の間を移動し、季節ごとに異なった食料を利用する複雑な生活パターンをもっていたようだ。このように長期的な循環で環境を利用するには、記憶や洞察力や集団の統制面での進歩が必要だったに違いない。またさらに、牙のないやせた二本足の動物が、ゾウのような大きな動物を狩りするには——もつとも実際は、斃れた動物をほかの屍肉あさりの動物に取られないように奪うことだっただろうが——優れた手腕が必要だったことだろう。ゾウは、ただ沼の中に迷い込み、ドロドロとした泥土に足を取られて沈んだだけだったのかもしれない。しかし、このような自然の罠にゾウが追い込まれた可能性もある。人間の小さな集団が、恐慌をきたした自分の十倍も体重がある危険な動物たちを、いったいどのようにして追いこむことができたのだろうか。正解は火である。ホモ・エレクトゥスが火をつけて、平原や藪を広範囲に焼いたことを思わせるような形で、古代の狩猟遺跡の周囲から炭化物の粒子が分布しているのが発見されている。「私の想像では、ゾウを川筋にそって沼へと追い込むためだったのだろう」と、人類学者のF・クラーク・ハウエルは書いている。いかなる動物よりもはるかに優れた知能をもった動物の存在を、はっきりと認めることができる。それは、より完全な意味で人間と呼ぶことのできる存在である。現在わかっている情報の多くを、再び想像上の物語りにしてま

めてみよう。⁽²⁰⁾

ホモ・エレクトゥスの道具作りが一人、石ころだらけの山稜にすわって、眼下に広がる土地を眺めている。すぐ近くに野営の煙が上がり、家を建てたり薪に使うための木の枝を引きずりながら、急ぎ足でバンドへやってくる人影が見える。バンドの成員がまた新たに到着したのだ。彼は、木を割る音、叫び声、笑い声、絶え間ないささやきなど、聞き慣れた物音に耳を澄ます。当時の原始的な会話は、感情的な音声信号に、おそらくは真の意味での言葉が混じったものであったろう。彼の目は、遠くの土地をすぎ、風を受けて矮性となった松や雑木の広大な森を南へと横切り、地中海が描く深い青色の弧線へと達した。一瞬、あの向こう側には何があるのだろうかと思ふ。だが、それは決して知りえぬことだ。百万年前のある朝のことであった。

バンドは何日もかけて移動してきた。それが何日だったのか彼は知らないし、考えることもできない。一日は時間に区切られておらず、年の観念もまだない。大きな数は彼には考えもつかない。だが、すべての仲間と同じように、太陽と星の毎日の動き、草や野性の花々の季節的な移り変わり、そして動物たちの移動によって時間の変化を感じることができた。こんなことなら彼はとてもよく知っていた。現代人の基準で見ても、この点では彼は利口だといえる。恐怖で眠れぬ夜を過ごした翌朝、彼の心はこんな想念に満たされていた。

前日の晩、日が暮れると、バンドは狩りに出たライオンの群れに襲われた。メスライオンが人間の



ホモ・エレクトゥスの社会の想像図(21)。ホモ・
ハビリスから現生人類へ至る移行種である。

露營地をしばらく取り囲んだ。ライオンは、身を寄せ合つたバンドの人々の前でうずくまり、尻尾を左右に振っている。腹を空かした猛獣がおのずと見せる仕草だ。やがて、不可解なことにライオンたちはいっせいに立ち上がり行つてしまった。だが、ライオンたちはそう遠くには行つていなかった。

ときどき深く咳をするような声や、灌木の茂みが掻き回されたり、小枝が落ちる音が一晩中あちこちで聞こえた。見張りの人間は、夜の闇のなかで何かか動いたか、今度は何が出てくるのかといふかたただらう。短い尻尾と剣のような牙をもつた奇怪な劍齒虎、狂暴なハイエナの群れ、そして現実の、というよりは想像上の形のない恐怖にとらえられたことだらう。化け物や悪鬼の原形である。暗闇一般を恐れ、見えざるものを気づかかつて戦々恐々とするほうが、何か脅威があるたびに時間をかけて学習し処理するよりもよい。この夜、ホモ・エレクトゥス時代の人間たちは、生態系のなかで逆転した位置に置かれていた。道具と組織的な活動は、人間たちをこれまでで最強の狩猟動物にしたが、足の遅いやせた体は、人間をその強敵、つまりもつとも狂暴な食肉獣の餌食にもしていたのである。

この道具作りは右手で石槌を取り上げた。それは、握りこぶしよりもわずかに大きい石英質の礫で、鈍い刃のついた端の方が、細くなつていた。彼は、左手を伸ばして未加工の同じ大きさの丸石を選び取った。彼がこんなことを始めたとき、お山の大将ごっこをやめた子供たちが斜面を登つて見に来た。彼は両手に二つの石を持って回している。彼は、最終的に仕上がつた道具のこと、それが必要な理由、道具をやるべき相手、使う方法を、判断し、選択し、考えている。この瞬間、彼の心の中で、異なつた可能性がいくつか浮かんで消えた。彼は手順を決めた。視覚的な、あるいは聴覚的なさまざまな

想念が、まるで標識をつけた数珠玉が糸を滑り落ちるように、刻々と意識のなかに押し寄せてくる。おそらく、彼は頭に浮かぶ概念を沈黙の言葉と結び付けているのだろう。「打つ……ひっくり返す……刃……石斧……やる……兄弟……馬」というようなものかもしれない。彼は、馬を解体するための石斧を作り、自分の兄弟にやろうとしている。このような原言語は、喚起されたとしても、概念が思い起こされていく豊かな流れに対しては不十分なものでしかないが、人類の進化過程のなかで、徐々にさまざまな概念に植え付けられていくのである。優れた言語が開花するのは、この後の一〇〇万年間のなかのある時点においてである。

道具作りは掌に未加工の石を乗せて、指でしっかりと握る。彼は、腕を胸元まで引き寄せると、緊張し、力一杯石槌を打ち下ろした。石屑が横に飛び、凹みができ、薄い石のへりに沿って鋭い稜が残った。その後彼は、石をひっくり返し、調べ、握って打つという作業を五〇回繰り返した。細かなもつと正確な打撃で、今度はへりの両側を削り、両面の刃を作った。こうして、アーモンド形の握斧が完成した。これは、もつと後にホモ・サビエンスが作るすばらしい石器には劣るが、ホモ・ハビリスの粗雑なチャロッパーに較べるとみごとにアシュレアン工作——ホモ・エレクトゥスの文化の指標である——の石器の一つである。ずっと洗練された道具を作るには、一〇〇回かそれ以上の打撃が必要なのに、この道具作りがそれをせず、ほぼ五〇回の打撃で止めたのは何か理由があるのだろうか。おそらく、彼にはこれ以上に良い物など思いつかなかつたのだろう。今彼の手に乗っている道具が、彼が考えうる最上のものであったのであろう。

この石器作りは、子供たちにまといつかれながら露营地へ下りていく。半球形の簡単な小屋がもうでき上がっていた。ちょうどこのとき、食料採集の一団が、根茎類や漿果や小動物を捜しに出発する。運が良ければ大きな獲物が見つかるかもしれない。そして、食物が分配され、道具が交換されることだろう。

何日かすれば、バンドは冬の集合地点に向けて移動していくだろう。そこで彼らは、見知った顔の並ぶ仲の良い集団と落ち合うことになる。大人のなかには大ざっぱに親族として認められる者もいる。古代人のやり方に従って若い娘たちが交換されるだろう。声と素早い身振りを感情を込めて交えながら熱心に会話が交わされる。本当の言葉——任意に選ばれた、意味を伝える象徴記号として使われる短い示差的な音声——も使われただろう。

男たちのなかには、大動物を狩りするために長距離の遠征を組織する者たちもいる。この一団は、海へと流れ下る、とある遠くの川に近づくにつれ一段と用心して進んで行く。他所者の縄張りとの境界があるのだ。以前狂暴な侵略を受け、バンドの仲間が何人も殺され、この他所者たちも数人死んだことがある。外見は同じだ（実際にホモ・エレクトゥスである）が、彼らは邪悪で本当の人間ではないかのようにだ。彼らのことは、まるで夜中にさまよう見えざる何かのようにほとんどわかっていない。もし、彼らを打ち負かして追い払うことができれば、バンド中の者が言いようのない安堵と喜びを感じるだろう。オーカーで体に縞模様を描き、踊り出したくなることだろう。

このようにして人間の精神は、ホモ・エレクトゥスが生息した一〇〇万年にわたる移行期の間に、遺伝的にいっそう複雑なものへと成長していった。しかし、ホモ・エレクトゥスの進化が他のほとんどの生物と比較していかに急速であったとはいえず、後にホモ・サピエンスによって担われた、旧石器時代から文明の誕生へといたる凄まじい変化に較べれば、はなはだしく緩慢であった。数十万年もの間に、石器製作の技術が進歩せず、むしろ退化した所もあった。この種の異変は、ホモ・エレクトゥスはアフリカから東アジアへと至る全域に広がったが、川や山脈や距離それ自体によって隔てられた何千もの集団に分かれていたことを考えると、説明できる。一つのバンドを構成していたのは、せいぜい三〇人から四〇人で、熟練した道具製作者は、その中のほんの数人に過ぎなかったと思われる。狩猟中の事故でもっともうまく道具を作れる者が死んでしまうと、集団全体の力が、何年にもわたって簡単に低下してしまつたのではなからうか。

とはいえず、ホモ・エレクトゥスの脳は、一センチ一センチ増大していき、百万年の間にゆっくりと大きくなつていった。人類学者のラルフ・L・ハロウエイが指摘したように、この進化をただ単に道具の使用に帰するのは間違っている。旧石器時代人の石器工作のみごとさは、その精神発達のすべての力を垣間見させるあらゆる指標にすぎないだろう。はるかに重要なのは、ホモ・エレクトゥスの時代に、複雑な社会関係が織りなされつつあったということだ。かなり粗雑な石器や骨器や木器を使って、現存の狩猟採集民や農耕民のもっとも単純な社会でさえ、社会組織の複雑さという点では、株式仲買人や大学教授の集団に勝るとも劣らないのである。彼らの日常生活は、親族、位階、タブーお



相次いで遷移した3種の人類，ホモ・ハビリスからホモ・エレクトゥス，ホモ・サピエンスへと至る脳の成長。小さい2つの脳（ハビリスとエレクトゥスのもの）の形は、頭蓋化石の内側にできた鈎型をもとに描かれた(23)。

よび義務の諸規則によって定められた、話し方と身ごなしの複雑な舞踊の体系である。この細かな作法こそ、精神發達の主要部分を方向付けた振り付け師であったといえよう。⁽²⁴⁾

五〇万年ばかり前、ホモ・エレクトゥスが行き詰まりをみせるとともに、ホモ・サビエンスと呼んでよい最初の人類が登場した。彼らは、はるかに大きな脳と、高度なものへと成長する言語能力を備えていた。約四万年前、おそるべき加速度を伴って物質文化の進化が始まった。素材だがしばしば美しい美しさを見せる洞窟壁画とともに、粘土や石の像という形をとって具象的な芸術が興った。三万二〇〇〇年前になると、ヨーロッパのある地域では、すでに文字の原初形態がはつきりとできあがっている。それは、装身具、骨や粘土の断片、および石につけられた浅い線刻である。同じモチーフが繰り返し現われており、雷文や魚形の凶形や平行線などの記述単位が認められる。⁽²⁵⁾ このような発明はすべて、ホモ・サビエンスの形質的進化の末期に出現している。サザンプトン大学のクライヴ・ギャンブルやハーヴァード大学のアレグザンダー・マーシヤックなどの人類学者は、人類はこの五〇万年の間に高度な知性を獲得したが、環境上の何か特殊な必要性が、長い間使われなかった潜在的能力を初めて使用させる引き金になったのだらうと推測している。化石の証拠から考えると、北半球で芸術が開花し始めた時期は、人類の異常なほど急速な人口増加と拡散に呼応している。象徴や具象的芸術は、成員権、地位、身分を登録するために必要となり、使用されはじめたのかもしれない。しかし、この入り組んださまざまなできごとのおかげで、いったい何が原因で何が結果だったのだらうか。後期旧石器時代の爆発的な文化發展を取り巻く状況は、人類進化の重大な謎の一つである。